

2022年 3月6日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

詩編 6編 「祈りはきかれる」 高橋彰

6 1 【指揮者によって。伴奏付き。第八調。賛歌。ダビデの詩。】

2 主よ、怒ってわたしを責めないでください

憤って懲らしめないでください。

3 主よ、憐れんでください

わたしは嘆き悲しんでいます。

主よ、癒してください、わたしの骨は恐れ

4 わたしの魂は恐れおののいています。

主よ、いつまでなのでしょう。

5 主よ、立ち帰り

わたしの魂を助け出してください。

あなたの慈しみにふさわしく

わたしを救ってください。

6 死の国へ行けば、だれもあなたの名を唱えず

陰府に入れ

だれもあなたに感謝をささげません。

7 わたしは嘆き疲れました。

夜ごと涙は床に溢れ、寝床は漂うほどです。

8 苦悩にわたしの目は衰えて行き

わたしを苦しめる者のゆえに

老いてしまいました。

9 悪を行う者よ、皆わたしを離れよ。

主はわたしの泣く声を聞き

10 主はわたしの嘆きを聞き

主はわたしの祈りを受け入れてくださる。

11 敵は皆、恥に落とされて恐れおののき

たちまち退いて、恥に落とされる。

聖書 新共同訳 (C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

詩編6編は、「賛歌」(ミズモール)とありますが、内容としては、悔い改めの詩編として、受難節(レント)の期間に特別に読まれ捧げられる祈りとして用いられてきた詩の一つです。(他に詩編 32、38、51、102、130、143)。個人的な深い心の深淵から声を絞り出すような詩が、伴奏付きで民が声を合わせて神に歌われると題されています。一人のいのちに起きた病と痛みの苦しみと神への叫びは、神に助けを求める祈りとして、共有され、それは人びとも結ぶ祈りとなっています。

この詩は、病に苦しむ人の叫びです。ここでは病の症状や診断の言葉はありません。病をそのように理解し表現することなく、病によって魂が受ける痛みや苦しみが表現されます。

「癒してください」「骨は恐れ」「魂は恐れおののいています」「いつまでなのでしょう」と、苦しみの中にある思いを注ぎだします。今の心身の痛み苦しみ、そしてそれが神の怒りに断罪されたのか、自身の命を否定されているように思える恐れや傷み、そしていつまで苦しみが続くのかわからない時間的な苦痛です。

絶大なる力を有する主なる神に、「主よ、憐れんでください」、怒りを鎮めてくださいと嘆願するほどに気弱になっていますが、回復したいと願い、そのために、主に対してわたしのもとに「帰ってきてください」と願います。神に近くにいてほしいと。

詩人は主に「あなたの慈しみ(ヘセド)にふさわしく」と、訴えます。主なる神の本質は「怒り」ではなく「慈しみ」であることを旧約では繰り返しあちこちで伝えられ、また人びとも神にそう呼び求めています。主の本性にしがたって、苦しむわたしのことを助けてほしいと願うのです。わたしを忘れないでくださいと。

主との関係が断絶されてしまうこと、この「慈しみ」から離れてしまうことが、詩人にとっては自分の存在の死に価することなのです。主の名を唱えることもない、感謝をささげる対象もない、願いや希望を持ち、声を上げることもない状態、場所が陰府です。

祈りの中で、詩人は自分が他の人びととの関係で敗れがあったことに目を向けます。「私を苦しめる者」「悪を行う者」「敵」がいます。しかし、その敵対の現実から離れることを願い、主に向かって助けを祈り求めた時、急展開のように、祈りが聞かれた確信を語り出します。自身がどれほど苦しみを負い、命の危機に陥り、またこの世の他の者との関係がどう破れているかにも関わらず、主に祈りをささげ礼拝することによって、主がわたしの祈りを聴くほどに近く、慈しみをもって共にいてくださるという確信を霊的に得、神との関係が生きていることを信じる時、自分と他者と神のいる世界が見え、自身を襲う苦しみも敵対も、すべて主に訴えゆだねることで、希望を持つのです。

教会の約束

わたしたちは、神の恵みによってイエス・キリストは主であると信じ、告白してバプテスマを受け、この教会の一員に加えられましたので、聖霊の助けによってこの約束をいたします。

わたしたちは、この教会が人によってではなく神によってできたものと信じ、主の日の礼拝、教会の定めた集会に参加し、教会がきよくなるよう、一致するよう、栄えるように祈ります。またバプテスマと聖餐の二つの礼典、そして聖書の教えと教会の定めた秩序とを守ります。

わたしたちは、この教会を支え、また世界に福音を伝え、神のみ心が広く行われるために進んで必要なものをささげます。

わたしたちは、主にある兄弟姉妹として愛しあい、互いの喜びと悲しみを共にいたします。

わたしたちは、ひとりで祈ることや家族と共に祈る生活を大切にし、わたしたちが預かった子どもたちを神に喜ばれるものになるように教え育て、またまことの心と正しい行いとすべての人を愛することによって、人びとを救いぬし、主に導くよう心掛け、主と再び会う時まで、この約束を固く守ります。

わたしたちは、どこにあってもこの約束の精神と神の言葉の真理が実行される教会に加わることを約束いたします。

日本バプテスト同盟 関東学院教会

「教会の約束」について

「教会の約束」と言われるこの言葉は、Church Covenant と言い、本来は教会契約と訳されるべきものです。

バプテスト教会の一番の特徴はこの「契約」を結ぶということにあると言われます。17世紀にイギリスに発足した初期のバプテスト教会は、ただ信仰を告白しバプテスマを受けた信仰者の集まりとしてではなく、「契約共同体」として教会形成がなされました。

契約とは、第一に神と教会員の、第二に教会員相互に交わされる二重の構造を持ちます。教会の一員になるとは、神との、そして信徒相互の契約のパートナーになるのだという自覚と責任をもって集まっていたのです。

一つの教会が各自で教会の契約を結ぶゆえに、各個教会が尊重されるのです。そういう意味で「教会の約束」はバプテスト教会の本質的で重要な意味を持っています。

本来ならば関東学院教会固有の「教会契約」があるのが望ましいですが、教会では、日本バプテスト同盟に連なる教会が多く採用してきた約束の言葉を採用してきていました。この「教会の約束」の本文は2009年改訂新版の日本バプテスト同盟「信徒の手引き」にある口語文の言葉です。かつて関東学院教会で唱えられていた文章は文語体でしたが、このたび聖餐式の中で唱和することを再開するにあたり、同内容の口語文を採用いたします。

聖書では、神はイスラエルと契約を結ばれた方であると証言しています。そしてイエスの十字架と復活は、神とわたしたちの新しい契約です。神は罪ある人を愛し、赦し、救い出して新たに生かしてくださいます。

約束してくださる神に支えられ促されて、わたしたちも神と、そして人々と、愛と赦しの関係に生きるというこの教会の約束を心から唱和し、その道に歩みたいと心から願います。